

# 雲井遺跡

(第8次調査)

—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要—

1998

神戸市教育委員会

# 雲井遺跡

(第8次調査)

—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要—

1998

神戸市教育委員会

## 序

阪神淡路大震災の惨禍からはや3年の月日が流れました。神戸市では、一日も早い市民生活の再建と市民が安心して暮らせる町作りに向けて努力しております。

この度の震災で234haもの埋蔵文化財包蔵地が被災しました。埋蔵文化財調査が復旧・復興の支障になるのではないか、と文化財関係者のみならず多方面で危惧されました。そのような中で、復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の整合を図るため、文化庁から基本方針が出されました。そして、兵庫県教育委員会を通じ、復旧・復興事業の円滑な運営と膨大な量の発掘調査を支援するため、平成7年度より全国の自治体から多数の専門職員が派遣され、慣れない土地にもかかわらず日々復興のためご協力いただいております。

本書でご報告する雲井遺跡の調査も、震災で全壊した事業用倉庫兼共同住宅の再建に伴うもので、兵庫県からの復興支援職員の派遣を受け、神戸市教育委員会職員と共同で調査実施したものであります。

今回調査いたしました雲井遺跡は、神戸市の都心部にあり、市街化された商工業地の地下に眠る遺跡ですが、近年都市再開発にともなって少しずつですが全体像が明確になりつつある遺跡です。今回の発掘調査では、弥生時代前期の周溝墓がみつかり、たくさんの土器が出土しました。これらの成果の概要である本書が、復興の足跡の記録として、また地域の歴史研究、生涯学習・文化財愛護の普及・啓発資料として広く活用され、復興事業・文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査実施にあたり快くご協力いただいた株式会社三上工作所、また職員派遣いただいた京都府教育委員会、調査ならびに本書の刊行にご協力いただいた兵庫県教育委員会、同埋蔵文化財調査事務所、ならびに関係各位に深く感謝いたします。

平成10年3月31日

神戸市教育委員会  
教育長 鞍本 昌男



## 例　　言

1. 本書は阪神・淡路大震災の復興に係る事業用倉庫再建に伴って実施した雲井遺跡第8次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査および調査後の遺物整理作業は国庫補助金をうけて実施した。
3. 今回の発掘調査は、神戸市中央区旭通3丁目38-5において、平成8年12月10日から平成9年1月18日まで実施した。調査面積は170m<sup>2</sup>の3面のべ510m<sup>2</sup>である。遺物の水洗整理作業は平成9年7月25日から平成9年8月29日まで実施した。
4. 発掘調査は、神戸市文化財専門委員の指導のもとに、以下の調査組織によって実施した。

### 調査関係者組織表

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）

檀上 重光　　神戸女子短期大学教授

和田 晴吾　　立命館大学教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 鞍本 昌男

社会教育部長 矢野 栄一郎

文化財課長 杉田 年章

社会教育部主幹 奥田 哲通

埋蔵文化財係長 渡辺 伸行

事務担当 学芸員 松林 宏典

調査担当 学芸員 西岡 巧次

技術職員 福島 孝行 兵庫県教育委員会復興支援（京都府派遣）

5. 現地調査では、調査補助員として同志社大学大学院生 堀 大介、同志社大学学生 壱岐 一哉の諸氏に参加していただいた。
6. 本書で用いた国土座標・標高値は㈱神戸測量に委託して測量したものである。なお、本書で用いた方位は座標北で、標高値は東京湾平均海水準（T.P）である。
7. 遺構写真は西岡、福島が適宜分担して撮影した。
8. 遺物の整理作業は、水洗作業員村田久美子、太田秀子、大谷人学学生 井上聖子の諸氏が行い、遺物の接合、実測図作成は堀 大介、壱岐一哉が行った。
9. 本書の作成は、本文第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅳ章は西岡が、第Ⅲ章は福島が担当し、全体の取りまとめは西岡が行った。挿図の作成・トレースは分担して西岡・福島・堀・壱岐が行った。なお、図版7の遺物写真は文化財課主査 丸山 潔撮影によるものである。
10. 本書所載の被災当時の株式会社三上工作所倉庫の写真は、株式会社三上工作所代表取締役島 健氏より提供していただいた。掲載等を御快諾いただき、ここに記して感謝いたします。
11. 調査及び報告書作成にあたっては下記の方々のご指導・ご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。

大村 敬通 山本 三郎 水口 富雄 複宣田佳男 藤井 整（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所） 岡田 恵一（奈良大学大学院）（敬称略）



# 目 次

- i 序
- ii 例言
- iii 目次
- iv 図版目次

## 本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境 .....	3
第1節 遺跡の立地 .....	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境 .....	4
(1) 既往の調査 .....	4
(2) 周辺の遺跡 .....	6
第Ⅲ章 発掘調査の概要 .....	9
第1節 基本層序 .....	9
第2節 検出遺構 .....	10
(1) 第1遺構面 .....	10
(2) 第2遺構面 .....	10
(3) 第3遺構面 .....	11
(4) 第4遺構面 .....	15
第3節 出土遺物 .....	15
(1) 弥生土器 .....	15
(2) 繩紋土器 .....	20
(3) 石器 .....	20
第4節 小結 .....	21
第Ⅳ章 まとめ .....	23

## 写 真 目 次

写真1 全壊した三上工作所倉庫兼共同住宅 .....	iv
写真2 復興した三上工作所倉庫 .....	8

## 表 目 次

表1 石器及び石材一覧表 .....	22
--------------------	----

## 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図 .....	1	第11図 S X301 平面・断面図 .....	13
第2図 調査区南北土層断面図 .....	2	第12図 S X305 平面・断面図 .....	14
第3図 位置図 .....	3	第13図 S X303 平面・断面図 .....	14
第4図 雲井遺跡の調査 .....	5	第14図 S X306 平面・断面図 .....	15
第5図 周辺の遺跡 .....	7	第15図 弥生土器実測図(1) .....	16
第6図 第1遺構面平面図 .....	9	第16図 弥生土器実測図(2) .....	18
第7図 第2遺構面平面図 .....	10	第17図 弥生土器実測図(3) .....	19
第8図 第3遺構面平面図 .....	11	第18図 繩紋土器実測図 .....	20
第9図 S D301 遺物出土状況図 .....	12	第19図 石器実測図 .....	21
第10図 S X302 平面・断面図 .....	13		

## 図 版 目 次

図版1－1 第2遺構面全景（北西より）	図版5－1 S X303 検出状況
－2 第3遺構面全景（南東より）	－2 S D301 鉢形土器出土状況
図版2－1 周溝墓2 （南より）	図版6－1 S D301 龍頭部出土状況
－2 周溝墓3 （西より）	－2 S D301 壺頸部出土状況
図版3－1 S D301 遺物出土状況（西より）	図版7－1 弥生土器
－2 S D301 遺物出土状況（東より）	－2 弥生土器 大型壺体部
図版4－1 S X301 検出状況	
－2 S X305 検出状況	



写真1 全壊した三上工作所倉庫兼共同住宅

# 第Ⅰ章　はじめに

現　況　　今回発掘調査を実施した神戸市中央区旭通三丁目は、雲井遺跡として周知される遺跡の範囲の北東部にあたり、JR三宮駅から東へ歩いて10分の市街地の真っ只中にあるといってよい地域である。旭通とその南の雲井通周辺は、什器・工具の問屋や從来から神戸の地場産業である洋家具の製造工場などや住宅が立ち並び、中層程度のビルディングや低層の木造家屋が混在し密集する地域であった。

震災の勃発　平成7年1月17日午前5時46分、阪神・淡路地方に激震が走った。阪神・淡路大震災の勃発である。神戸市の中心部であるJR三宮駅周辺でも中層のビルディングの数多くが倒壊し、都市機能が麻痺状態に陥った。木造の低家屋については、さらにその被害は甚大で、家屋の下敷きとなり、死傷した人々はおびただしい数に昇った。

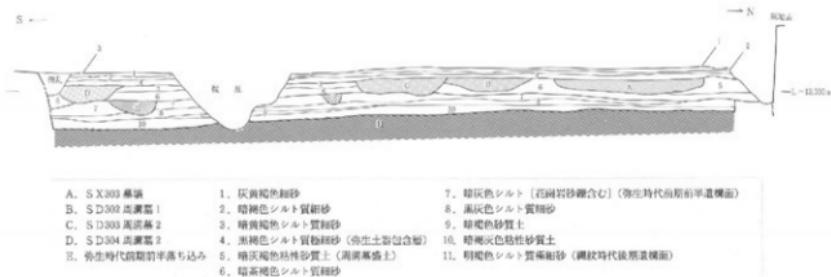
旭通三丁目の家具製造販売を営む株式会社三上工作所の木造2階建ての倉庫兼共同住宅も1階部分が倒壊、2階部分が1階部分を押しつぶす状態で全壊した。幸いにも1階部分は家具倉庫、2階部分は住宅として利用されていたため、住宅の居住者の方々には死者はなく、軽い負傷者をだしだけで自力脱出乃至は救出された。



第1図　調査地周辺図 (S=1:5000)

調査に至る経過　震災後の平成8年秋、神戸市内に復旧・復興の旋音高らかな中、三上工作所では震災で全壊となった倉庫兼共同住宅の跡地に新倉庫建設の計画が立案された。もとより新倉庫建設予定地は、雲井遺跡の範囲内にあり、また当該地の南隣は平成8年3月に雲井遺跡第7次調査が実施されていたことから、平成8年11月27日付けて株式会社三上工作所代表取締役島 健氏より文化財保護法第57条の第2項の届け出と神戸市教育委員会宛試掘依頼書が提出された。これをうけて、平成8年11月28日に2か所の試掘坑を設定して試掘調査を実施した。試掘調査では、弥生土器を含む土層が検出され、概ね5年前後の造構面が存在すると想定された。この試掘調査の結果をもとに協議を行った結果、建設予定建物の基礎工事の根きり底が敷地北面の歩道面から1.38mまでの深さで止まることから、調査範囲を工事影響範囲に止めることとした。また調査体制については、兵庫県教育委員会復興支援職員の応援をえて工期短縮を図ることとした。さらに、隣地を保全する土留め工事は施工して、早期の調査実施を行うこととした。

調査の経過　調査は、平成8年12月10日造成土と旧耕作土までを重機械で除去して開始した。旧耕作土以下の擾乱部分と土層を人力によって除去し、排出土は4tダンプに直接積み込んで場外処分とした。調査地内の土層の観察は、調査地中央に十字に土層観察用畦を設定して記録した。その結果、工事影響範囲で3面の造構面を検出した。調査は第3造構面の周溝墓墳丘土を工事影響範囲まで除去して終了したが、今後の調査資料を得るために調査区中央南北にトレンチを設定して、下層の確認調査を実施した。その結果、墳丘下の暗茶褐色シルト質細砂から弥生時代前期前半と考えられる土器片が出土し、その下面の暗灰色シルトから掘り込まれた落ち込み2か所を検出した。確認調査は第3造構面から85cm下の明褐色シルト質極細砂面まで確認した。この明褐色シルト質極細砂面は周溝墓2の溝底で縄紋時代後期の深鉢とピット2か所を検出した面と同一面であるが、確認トレンチでは造構・遺物は検出されなかった。

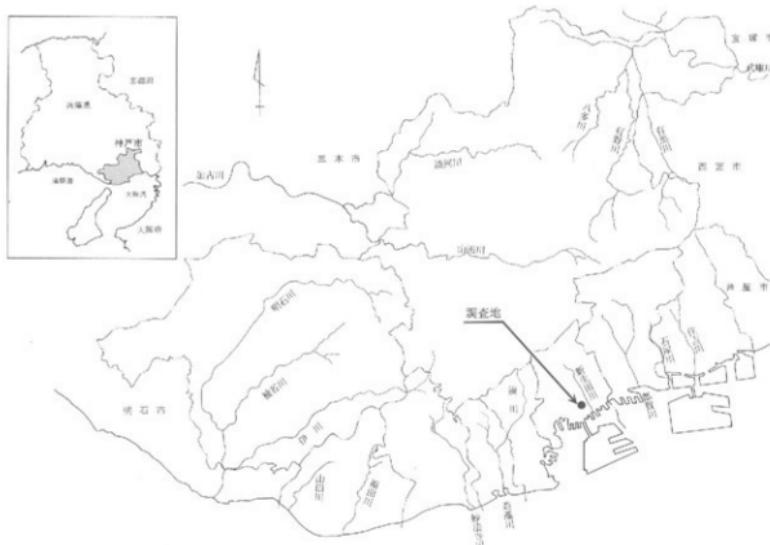


第2回 調査区南北土層断面図 (S=1:100)

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

六甲山を背にした神戸の市街地は、大阪湾に面した山腹の山麓扇状地が細長く東西に連なる傾斜地の上に発達してきた街である。この六甲山塊と大阪湾に挟まれた隠かな平野を南北に刻むように六甲山を源とする河川が大阪湾に流れ込み、海岸平野を形作っている。東から住吉川、大石川、生田川、湊川、苅藻川、妙法寺川などがあり、いずれの河川も流域面積も狭く、流路も短いため、氾濫を繰り返し流路も安定していなかったであろうと推定される。なかでも、生田川は摩耶山西麓を源として、布引山の西から平野部に出て、現在のフランロードを流路として南に流れ、神戸税関付近を河口とし、最も流路が短く、高低差のある河川の代表である。この生田川は、江戸時代末期から明治4年にかけて、河川の付け替えが、加納宗七によって行われ、現在の新神戸駅から小野浜にいたる新生田川が作られている。雲井遺跡は、上述した旧の生田川左岸、複合扇状地の末端に近い緩傾斜地（現地表高12.5m～15.0m）に立地している。



第3図 位 置 図

## 第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

神戸市の市街地は、明治18年・19年当時現在のJR神戸駅周辺を中心に、西は兵庫、東は三宮南部の海岸沿いの所謂居留地に止まっていた。ところが明治43年には、西は和田岬、東は葺合付近にまで展開し、大正12年頃にはほぼ現在の市街地に近い街並みが形成された。わずか十数年の爆発的都市化といえる。その中で、雲井遺跡が所在する現在のJR三宮駅周辺は、明治初年撮影の風景写真〔神戸市1989〕によれば緩やかな傾斜地に段々に造られた水田がひろがるが、明治19年の仮製図〔陸軍測量部1887〕においても水田地帯として記録されおり、明治期の都市化が比較的緩やかなものであったことを示している。したがって、雲井遺跡周辺の都市化は概ね大正期の人戦景気を契機とした神戸近代化の結果といえる。

戦後、戦災復興事業によって雲井遺跡周辺の主な街路は整備されるが充分でなく、昭和50年代以後、都市再開発事業が活発に事業実施されるに伴って埋蔵文化財調査が実施されるようになった。雲井遺跡発見の端緒は、昭和62年3月の雲井通6丁目再開発ビル建設に係る事前の試掘調査であった。試掘調査の結果、地表下60cm～70cmで多量の弥生土器を含む遺物包含層が発見され、事業地内全域について本格的な発掘調査が実施された。以後、雲井遺跡の調査は8次を数える。

### (1) 既往の調査

- 第1次調査 昭和60年に年6月の雲井通6丁目再開発ビル建設に係る調査では、縄文時代早期の炉址・集石遺構、縄文時代前期～後期の上器、縄文時代晚期の落ち込みなどが検出されている。また、弥生時代中期には6基の周溝墓が確認され、溝を共有しながら連続して营造される弥生時代中期の集団墓の実態が明らかとなった。〔丹治1991〕
- 第2次調査 平成元年の雲井通4丁目再開発ビル建設に係る調査では、縄文時代後期～弥生時代前期に至る上坑・ピットや古墳時代の河道などが検出され、遺跡が時期を違えながらも東に拡がることが明らかとなった。(淡交文化財協会調査)
- 第3次調査 平成元年の市道拡幅に伴う調査では、縄文時代後期～弥生時代前期の土坑・ピットと古墳時代の流路も確認されて、縄文時代～弥生時代前期の遺跡の中心が、遺跡の東部にあることがうらづけられた。また、同年5月に旭通5丁目に計画された民間再開発ビル建設に先立つ試掘調査では、旭通5丁目全域に中世～弥生時代の遺構が検出され、遺跡の拡がりが第1次調査地点よりも北東に拡がり、予想より広大な遺跡であることが明らかとなった。(市調査)
- 第4次調査 その後、平成3年に旭通5丁目で実施した第4次調査では、縄文早期前半の大川式・神宮寺式に相当する時期の集石遺構が10カ所、土坑、弥生時代前期後半の周溝などが発見されている。〔安田1994〕
- 第5次調査 平成3年の旭通5丁目の第4次調査をうけて、平成4年に医院建設に伴う調査が実施され、縄文土器・弥生時代の溝、中世ピット・土坑などが検出されている。(市調査)
- 第6次調査 平成5年に旭通2丁目で福祉センター建設に伴って実施された第6次調査では、弥生時代中期の溝、古墳時代後期の溝・ピットなどが検出されている。(市調査)

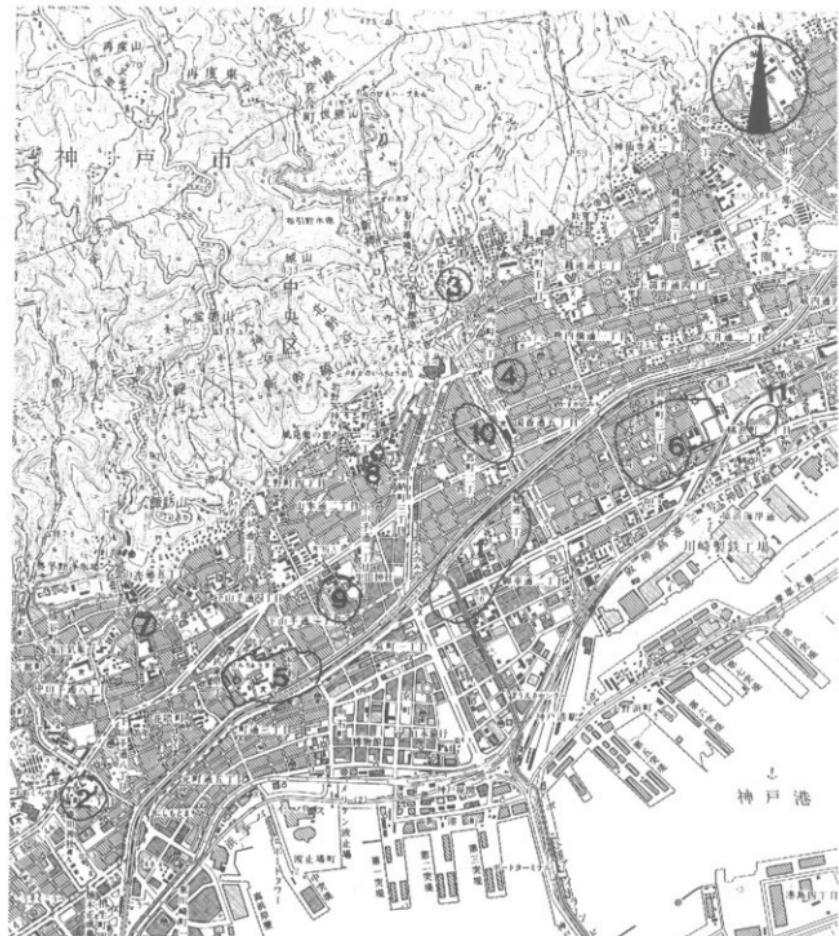
第7次調査 平成8年3月の震災復興に係る共同住宅建設に伴う第7次調査では、中世の掘立柱建物1棟、弥生時代の周溝が検出されている。この第7次調査地点は、今回報告する第8次調査地点の南隣にあたる。(市調査)

このように、現在までの雲井遺跡の範囲は、北はJR神戸線の南から、東は新生田川右岸、西は旧生田川左岸、南は御幸通六丁目におよぶ東西7km、南北3kmの地域と考えられている。



## (2) 周辺の遺跡

- 雲井遺跡のある生田川流域を中心にして中央区の主要遺跡について概観する。
- 旧石器・  
縄紋時代 中央区では、現在までのところ旧石器時代に遡る遺跡は確認されておらず、遺物としての石器そのものも採集されていない。しかし、雲井遺跡の第4次調査〔安田1994〕の最下層で縄紋時代早期前半の集石造構と大川式・神宮寺式の土器が検出されていることから、近い将来旧石器時代～縄紋時代草創期に遡る遺跡が発見されるものと考えられる。
- 縄紋時代前期の遺構・遺物は、雲井遺跡の第1次調査〔丹治1991〕で4基の炉跡と共に羽島下層Ⅱ式～Ⅲ式の土器群が検出されている。また、明確な遺構は伴わないが中期～後期の上器群も出土している。なお、縄紋時代後期の土器は中央区西部の宇治川右岸段丘上に位置する宇治川南遺跡〔丹治1986〕でも出土している。
- 弥生時代 生田川の流域平野部において弥生時代前期に遡る遺跡は、雲井遺跡でしか確認されておらず、その雲井遺跡も周溝墓などの当時の墓域に関わる遺跡で、集落関連の遺跡は現在のところ確認されていない。
- 弥生時代中期後半になると、生田川が平野部に流れ出る左岸独立丘陵上(標高140m)に布引丸山遺跡〔小林1935〕が出現する。弥生土器が多数採集されており、大阪湾岸の高地性集落の1つと考えられている。
- 弥生時代後期には、雲井遺跡の北東新生田川の左岸に熊内遺跡〔丸山1992〕が出現する。現在までに2次の調査〔浅岡他1996〕が実施され、堅穴住居などが検出されている。堅穴住居のなかには、屋内高床部を造り付けるものがあり、時期は弥生時代後期後葉と考えられている。
- その他、中央区の西部宇治川左岸の傾斜面に位置する伊三宮駅構内遺跡〔菅本1993〕、東部の西郷川右岸の日暮遺跡〔谷1989〕・脇浜遺跡でも後期の弥生土器が出土しているが、明確な集落遺跡として確認されていない。
- 古墳時代 先にも述べたように、中央区内は明治時代以後急激な市街化が進んだ地域であるため、ほとんどの古墳が、削平を被り壊滅したと考えられる。
- そのなかで、『西摂大観』〔仲1911〕によれば生田川の右岸、六甲山南麓にあたる現在の山本通付近に「黄金塚」・「中宮古墳」の記載がある。黄金塚古墳は、現在は寺域の中の築山として墳丘を残しており、寺境内整備の際に確認調査〔菅本1994〕が実施されている。確認調査の結果、直径10m前後の円墳に南南東に開口する横穴式石室を検出した。羨道部付近から7世紀前半の須恵器が出土している。中宮古墳〔神戸地方古墳1956〕は黄金塚古墳に近接していた古墳で、1916年に発掘調査が行われ、金環・銀環・切子玉・丸玉・鉄鎌・直刀・斧頭などが出士している。横穴式石室を主体部とする前方後円墳であった可能性があるとされるが、明確ではない。その他、北野町二丁目付近には三本松古墳がある。雲井遺跡の北に隣接する生田町二丁目付近には7～8基の古墳があり、新生田川開削の際に破壊されたという。また、破壊された古墳のなかには2基が連結するものがあったとされ、前方後円墳があったとも予測できる。現在まで伝承として残る生田川流域の古墳は、いずれも横穴式石室を用いる古墳時代後期の築造と考えられ、なお多くの古墳が市街化され地下に埋もれていると推測される。
- 古墳時代の集落遺跡には生田遺跡〔丸山1990〕がある。生田遺跡は阪急三宮駅の北側、三宮の繁華街の直中に位置し、ホテル建設に先立つ発掘調査で発見された遺跡である。調査の結果、



第5図 周辺の遺跡 ( $S = 1:50000$ )

- |           |             |             |            |
|-----------|-------------|-------------|------------|
| 1. 雲井遺跡   | 4. 熊内遺跡     | 7. 中宮・黄金塚古墳 | 10. 生田町古墳群 |
| 2. 宇治川南遺跡 | 5. 旧三宮駅構内遺跡 | 8. 三本松古墳    | 11. 臨浜遺跡   |
| 3. 布引丸山遺跡 | 6. 日暮遺跡     | 9. 生田遺跡     |            |

竪を造り付ける堅穴住居と縦柱の掘立柱建物が検出されている。掘立柱建物は、建物の方向・規模が均一に建てられており、六世紀初め～前半に継起的に営まれた倉庫群と考えられている。また、生田遺跡は式内社生田神社の西隣にあたり、神功皇后攝政前紀の活田長嶽国と考えられている地域にあたることから、官衙的色彩の濃い建物と考えられている。

その他、中央区東部の西郷川右岸にある日暮遺跡では古墳時代中期の堅穴住居が検出されている。また、宇治川左岸の旧三宮駅構内遺跡では古墳時代の遺物が出土している。

#### 奈良時代

中央区内の奈良時代の遺跡としては、旧三宮駅構内遺跡があげられる。旧三宮駅構内遺跡は、学校統合に伴う神戸中学校建設に先立つ調査で発見された遺跡である。調査の結果、奈良時代の掘立柱建物1棟が検出されている。旧三宮駅構内遺跡は、古代山陽道と推定される元町通商店街通りの北150mに位置し、その立地も六甲山南麓から南に延びる丘陵尾根上の高台に位置する点から、奈良時代における交通の要衝に構えられた公的な施設の一部と考えられる。

以上、生田川流域を中心にして、中央区の原始・古代の主要遺跡を概観した。いずれの遺跡も明治時代以来の市街地化のなかで、ビルディングや住宅の下から発見されたものであり、部分的な発掘調査に止まるが、徐々に調査資料が増加して地域史の復元が可能になりつつあるのが現状である。

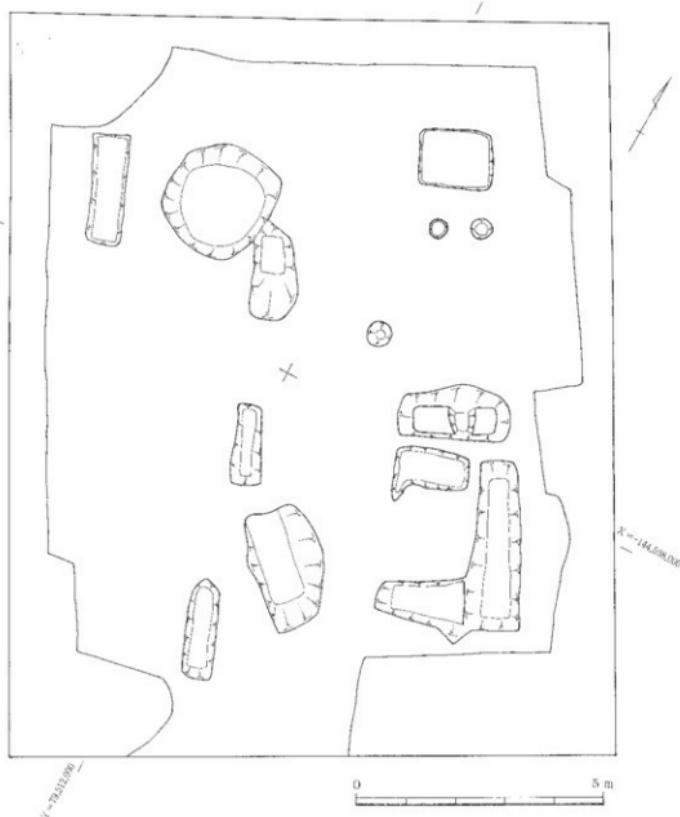


写真2　復興した三上工作所倉庫  
(平成10年3月撮影)

## 第Ⅲ章 発掘調査の概要

### 第1節 基本層序

当調査地の基本層序は上層から、造成土、旧耕作土、床上が堆積しており、この直下の黄灰色細砂の上面が後述する第1造構面である。この黄灰色細砂は古墳時代後期から奈良時代の遺物を含んでいる。この層の直下に弥生土器のみを含む黒褐色シルト質極細砂層があり、この層の上面が第2造構面である。この層の直下に極暗褐色シルト質極細砂層があり、この上面が第3造構面である。またこの層の直下が第4造構面であるが、工事による掘削深度に達しなかつた。



第6図 第1造構面 平面図

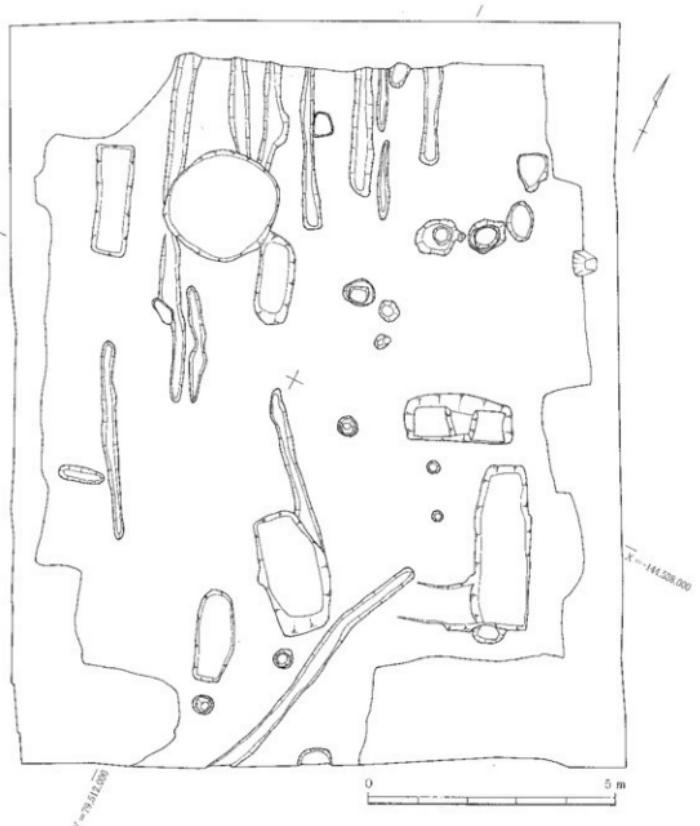
たので、面的な調査は行わなかった。

## 第2節 検出遺構

### (1) 第1遺構面（第6図）

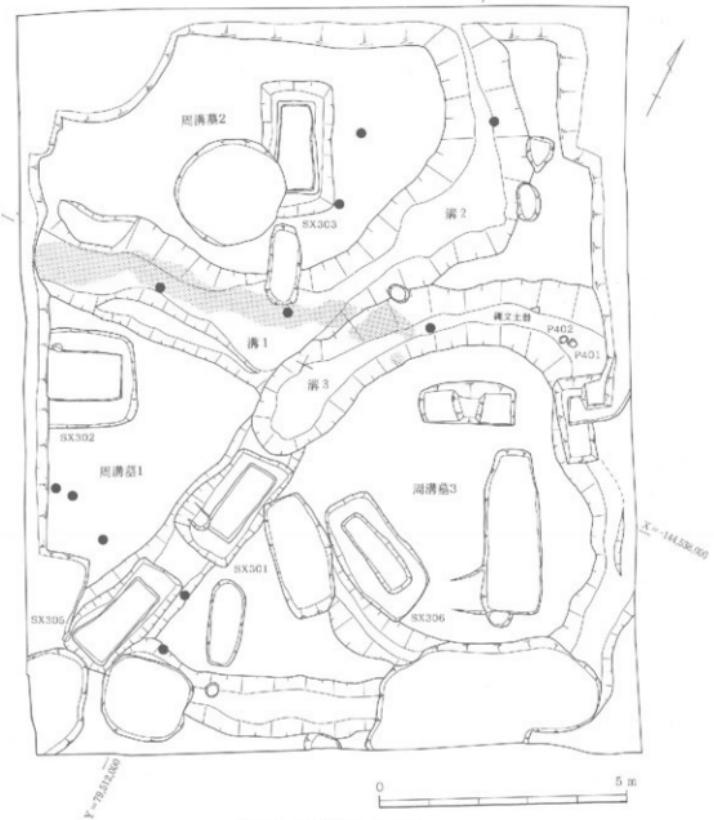
当調査地点の南に隣接して第7次調査地点があるが、黄灰色細砂は7次調査地点にまで広がり、中世の掘立柱建物などの遺構を検出している。したがって8次調査においても遺構の検出が期待されたため、第1遺構面として精査を行った。しかし、後世の擾乱による破壊が激しいため、顕著な遺構は検出されなかった。

### (2) 第2遺構面（第7図）



第7図 第2遺構面 平面図

検出した遺構は素掘り溝12条、柱穴13基である。素掘り溝はおしなべて断面U字形で、幅10cm、深さは5cm前後である。素掘り溝12条の内10条は北西から南東に向かって伸び、調査地の敷地に平行であることから、この周辺の道路や建物の向きが、この面の時期から変化していないことが明らかとなった。柱穴の掘形は直径20cm～90cm、柱痕跡は直径30cm前後のものと、50cm前後のものとがある。建物の存在は予想されるが、調査地内ではまとまらず、調査地外に展



第8図 第3遺構面 平面図  
(黒丸はサヌカイト出土地点、網掛けは土器集中地点)

開するものと思われる。遺物は古墳時代後期から奈良時代の土器が出土した。

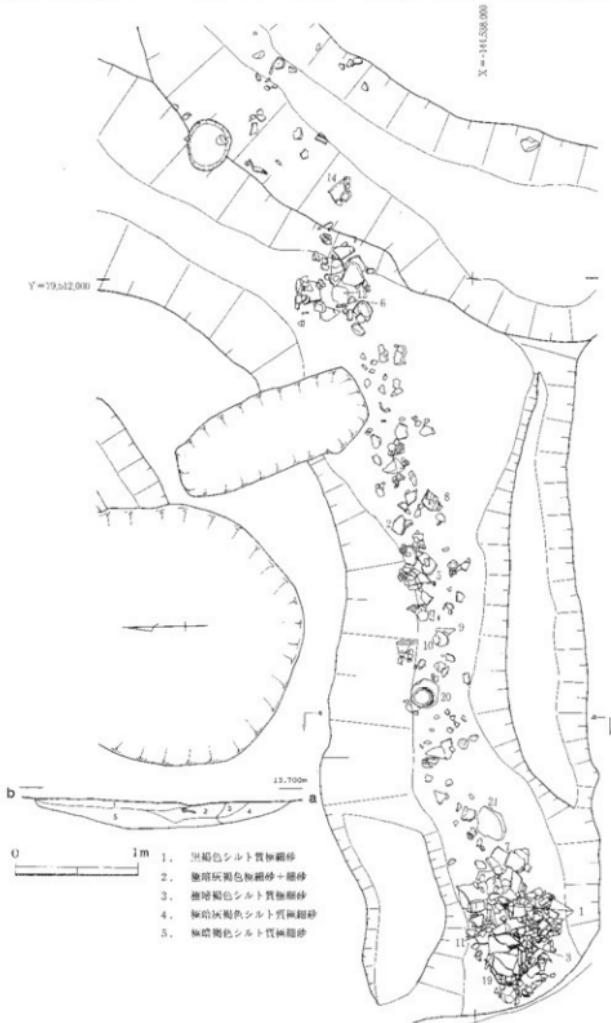
### (3) 第3遺構面(第8図)

第3面は第2面を除去して検出した。検出した遺構は、溝4条、木棺墓5基である。

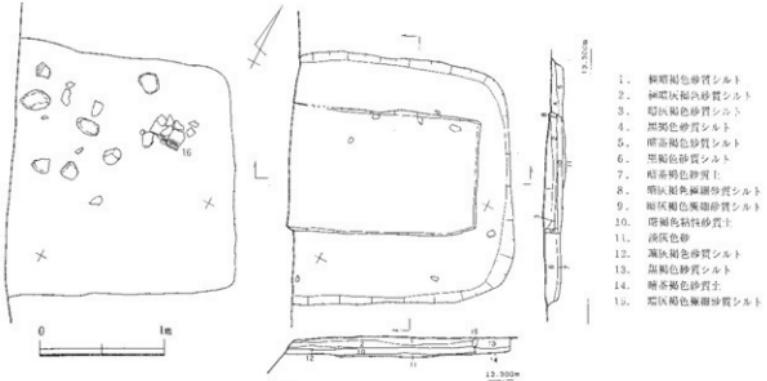
周溝墓1　溝1(SD301)に囲まれた、ややいびつな方形ないし長方形を示すと考えられる周溝墓であ

る。台状部の検出長東西5.05m、南北7.1mを測る。台状部には20cm前後の盛土が認められ、盛土内には細片化した弥生土器が含まれている。

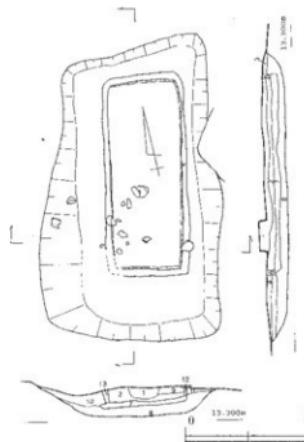
溝1は東西5.7m、幅1.8~2.0m、深さ24cm、南北6.0m、幅1.3m、深さ13cmを測る。北東隅は溝3（SD303）によって切られている。溝1の台状部の北側には弥生時代前期新段階の土器



第9図 SD301 遺物出土状況図



第10図 SX302 平面・断面図



第11図 SX301 平面・断面図

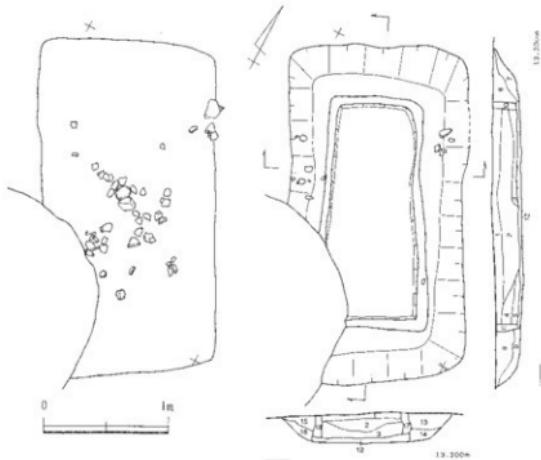
る。掘形は長軸2.3m、短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ16cmを測り、長軸1.61m、短軸0.68mの木棺を納める。残存する木棺痕跡の深さは12cmを測る。第2主体部の上部にも拳大の花崗岩礫、土器片が出土した。木棺は北側が狭く、南側が広いため、南枕であったと考えられる。第3主体部(SX305)は第2主体部の南側の溝1の内部に位置し、長軸2.6m、短軸1.2m、深さ16cmの不整形な掘形に、長軸1.85m、北側の短軸0.65m、南側の短軸0.85m、深さ12cm残存する木棺痕跡を検出した。木棺の南北隅にあたる部分に、木棺の側板を支えたと考えられる平板な石を検出した。木棺は北側が狭く、南側が広いため、南枕であったと考えられる。各木棺内からは少量の土器の細片を除き、遺物は出土しなかった。

が一括で出土した。出土した層位は溝底より20cm程浮いていたが、上器のレベルはほぼ一致しており、折り重なるように出土している。主体部は台状部上で1基と、台状部の東側の溝1の内部で2基検出した。第1主体部(SX302)は約半分が調査区外へ伸びるため、東半分を検出した。掘形の長軸1.8m以上、短軸2.0m、深さ15cmを測る。掘形の中央に木棺痕跡を検出した。木棺痕跡は長軸1.5m以上、短軸0.98mである。この主体部上にはほぼ完形の甕が上圧で押し潰された状態で出土し、ほぼ木棺の上部にあたる位置には拳大の花崗岩礫が出土した。土器は主体部上に置かれた供献土器と考えられる。花崗岩礫は標石の可能性が考えられる。第2主体部(SX301)は台状部の東側の溝1内部に掘り込まれて

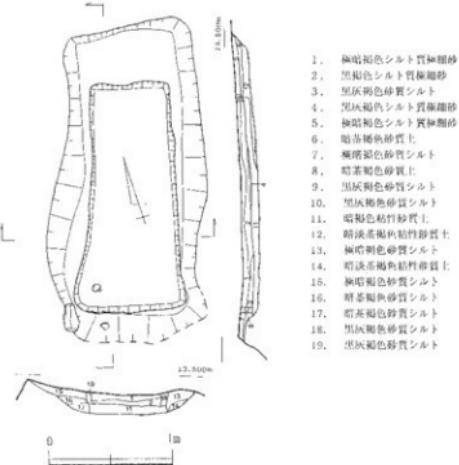
周溝墓 2 周溝墓 1 と溝 1 を共有し、溝 2 (SD302) に囲まれた、不整形な周溝墓である。約半分が調査区外へ伸びるため、規模は不明である。台状部にはやはり 20 cm 前後の盛り土を行っており、発生土器の細片が包含されている。

溝 2 は幅 1.3~2.2 m、深さ 16 cm を測る。平面形態は不整形な弧を描く。ここからの遺物の出土は少ないが、埴丘の肩部に完全形の甕が 1 点、上辺で押し潰された状態で出土した。台状部中央やや南よりで、主体部 (SX 303) を検出した。掘形は長軸 2.7 m、短軸 1.35 m の隅丸長方形で、深さ 25 cm を測る。掘形の中央に木棺痕跡を検出した。木

棺痕跡の長軸 1.86 m、短軸 0.75 m で、南に向かって広がるが、南端は掘形と共に後世の搅乱によって切られている。南に向かって木棺幅が拡がることから、南枕であったと考えられる。木



第13図 SX303平面・断面図



第12図 SX305 平面・断面図

1. 暗褐色色砂質土質細粒
2. 黒褐色色砂質土質細粒
3. 里灰褐色砂質シルト
4. 黒灰褐色シルト質細粒
5. 黒褐色色砂質土質細粒
6. 暗褐色色砂質土質
7. 暗褐色色砂質土質
8. 暗褐色色砂質土質
9. 黑褐色色砂質土質
10. 黑灰褐色色砂質シルト
11. 暗褐色色砂質土質
12. 暗褐色色砂質土質
13. 暗褐色色砂質シルト
14. 暗褐色色砂質土質
15. 暗褐色色砂質シルト
16. 暗褐色色砂質シルト
17. 暗褐色色砂質シルト
18. 黑灰褐色色砂質シルト
19. 黑灰褐色色砂質シルト

棺内からは少量の土器の細片を除き、遺物は出土しなかった。主体部の上部、特に木棺の上部では、やはり拳大の花崗岩礫及び、弥生土器片の集中が見られた。

**周溝墓 3** 周溝墓 1 の溝 1 を切る溝 3 (SD303) に囲まれる不整円形の周溝墓である。台状部は直径 6.1m の不整形な円形である。台状部は 20 cm 前後の盛土を行っており、弥生土器の細片が包含されている。溝 3 は幅 0.8~1.2 m、深さ 20 cm ほどで、台状部の西側で途切れ、陸橋状になっている。台状部の北側では弥生前期段階の土器が出土した。また、溝の最下層が下層の造構面を切っていることから、繩紋土器も出土した。台状部の西よりで主体部 (SX306) を検出した。掘形は、長軸 2.5 m、短軸 1.4 m、深さ 25 cm を測り、その中央で木棺痕跡を検出した。木棺は長軸 1.8 m、短軸 0.53 m、深さ 25 cm を測る。木棺内からは少量の土器の細片を除き、遺物は出土しなかった。台状部の中央からは主体部が検出されなかったが、中央部が攪乱を受けており、また削平を考慮すれば、主体部が存在した可能性が考えられる。

#### (4) 第 4 遺構面

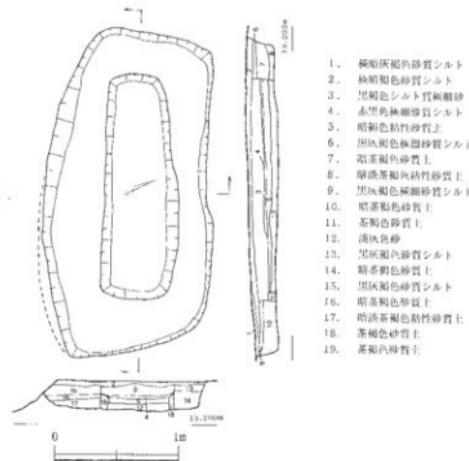
面的な調査は行わなかったが、周溝墓 3 の周溝である溝 3 の北西の底で、下層の造構面に掘り込まれている柱穴を 2 基確認した。この造構の時期は前述の溝 3 の底で出土した繩紋土器の東約 1 m の地点にあることから、繩紋時代のものである可能性がある。

### 第 3 節 出土遺物

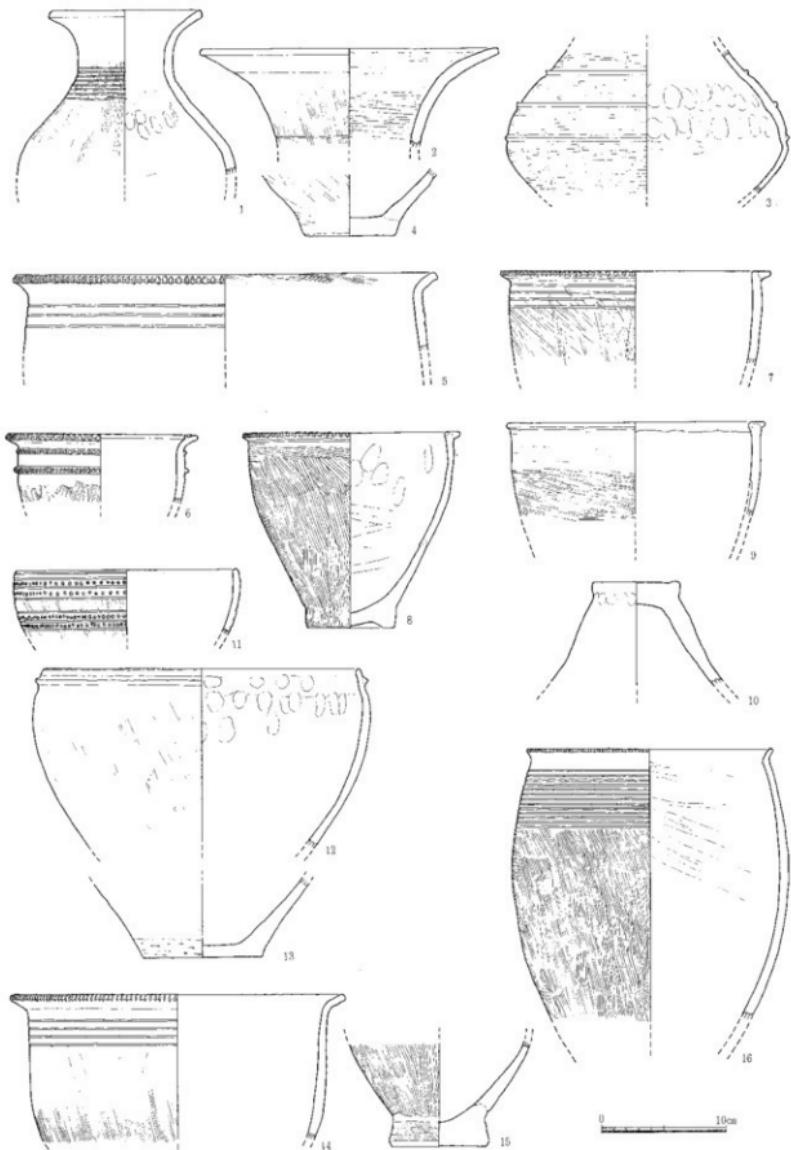
#### (1) 弥生土器 (第 15・16 図・17 図)

**SD301** 1 は広口壺の口縁である。口縁部径 11.8 cm、残存高 13.2 cm。口縁部は外反し、端部に面を持つ。頸部から胴部にかけてはやや直線的に広がり、最大径部分で強く屈曲する。外面調整は縦方向のハケ調整の後ナデ調整、内面調整は胴部から頸部にかけてはハケ調整の後指押さえとナデ調整、口縁部は籠ミガキを施す。頸部外面の紋様は 8 条の籠描き沈線文である。色調は淡褐色～黄灰色、胎土には白色飴物粒を含み、焼成はやや軟質である。

2 は広口壺の口縁部である。口縁部径 23.5 cm、残存高 7.9 cm。口縁部は外反し、端部に面を持つ。外面調整は上半部は横方向のナデ調整、下半部は縦方向のハケ調整の後にナデ調整を行っ



第 14 図 SX306 平面・断面図



第15図 弥生土器実測図(1)

ている。内面はハケ調整を施しており、端部には横方向のナデ調整を施している。色調は外面が灰白色で、内面は灰褐色を呈す。胎土には1mm大の白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

3は壺の胴部である。胸部最大径22.6cm。強く屈曲する胸部の2カ所と肩部に断面二角形の貼付け突帯を付す。外面調整は横方向の箒ミガキを施す。内面はナデ調整を施し、胸部上半には指押さえが見られる。色調は外面は淡褐色で一部黒斑があり、内面は灰白色である。胎土には白色鉱物粒を少量含む。焼成はやや軟質である。

4は壺の底部である。底部径7.2cm。平底から直線的に広がる胸部へと続く。外面調整は縦方向のハケ調整の後、荒いミガキを施す。内面調整はナデ調整である。色調は外面は淡褐色で一部黒斑があり、内面は灰白色である。胎土には白色鉱物粒を少量含む。焼成はやや軟質である。

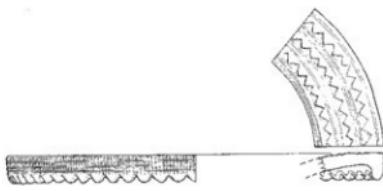
5は甕の口縁部である。口径33.4cm、残存高6.3cm。口縁部は如意状に外反し、端部に面を持つ。磨滅のため、外面調整はナデ調整の後口縁端部を横方向にナデる。内面調整はハケ調整の後ナデ調整で、口縁部のみ横方向のナデ調整である。口縁端部には箒による刻目を入れ、外面の屈曲部の下部に3条の箒描き沈線文を施す。色調は明褐色。胎土には2mm大の細礫を含む。焼成はやや軟質である。

6は甕の口縁部である。口縁部径14.8cm、残存高5.5cm。口縁部は如意状に外反し、端部に面を持つ。また口縁部内面に突帯をめぐらし、ハケによる刻目を入れる。外面調整は下半部に縦方向のハケ調整を施し、施文部より上部にはナデを施す。内面は口縁部に横方向のハケ調整を施すほかは、磨滅のため不明である。口縁の屈曲部の下部に2条の貼付け突帯を付し、この突帯と口縁端部にハケによる刻目を入れる。口縁部内面にも貼付け突帯をめぐらしている。色調は外面黒褐色、内面淡褐色で胎土には白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

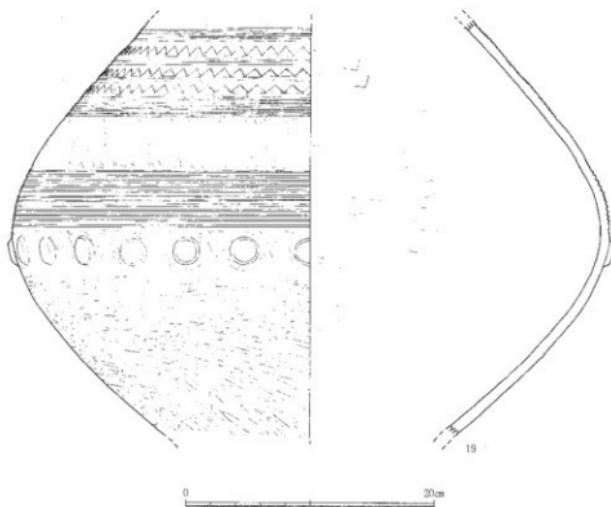
7は甕の口縁部である。口縁部径18.6cm、残存高7.6cm。口縁端部外面に器壁に対して垂直に粘土紐を貼付け、逆L字状口縁にしている。この突帯の器壁との接合面には位置決めの沈線がある。体部外面は縦から斜め方向のハケ調整の後ナデ調整を施し、口縁部は横方向のナデ調整を施す。内面調整は磨滅のため不明である。口縁端部にハケによる刻目を入れ、口縁部の下部に4条の箒描きの沈線文を施す。色調は灰白褐色で、胎土には0.5mm大の白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

8は甕である。口縁部径15.6cm、器高15.7cm。成形は粗く、各所に粘土紐の接合痕を残す。口縁部外面には器壁に対して垂直に粘土紐を貼付け、逆L字状口縁にしている。外面調整は胸部は縦方向のハケ調整で、口縁部直下は横方向のハケ調整である。内面調整はハケ調整の後ナデ調整、口縁端部は横方向のハケ調整の後に横方向のナデ調整を施す。口縁部端部にハケによる刻目を入れている。色調は外面が明赤褐色～黒褐色で、1～2mm大の白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

9は甕である。口縁部径18.4cm。口縁端部に粘土紐を貼付け、逆L字状口縁にしている。外面調整は下半部は横方向のハケ調整、上半部がナデ調整である。内面調整は下半部に縦方向の板ナデ調整を施しているほかは磨滅のため不明である。色調は灰白色、胎土には0.1～2mm大の白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。



18



19

第16図 弥生土器実測図(2)

10は蓋の蓋である。頂部径6.8cm。平たい頂部からやや外反気味に広がる。かなり厚手の作りであり、内面にはハケ調整の後、指で荒く掻き上げた痕跡を残す。外面調整は横方向のナデ調整である。色調は灰白色、胎土には0.1~2mmの大色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

11は直口の鉢である。口縁部径17.5cm、残存高5.3cm。口縁部はやや内弯し丸く収める。外面調整は縦方向のハケ調整で、施文部はハケメを消すためにナデ調整を施し、口縁部を横方向にナデる。内面調整は横方向のナデを施す。外面には3条一組の籠描き沈線文を二組施し、沈線文の間に竹管文をめぐらす。色調は外面は淡褐色、内面は明灰褐色である。胎土には0.1mmの大白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

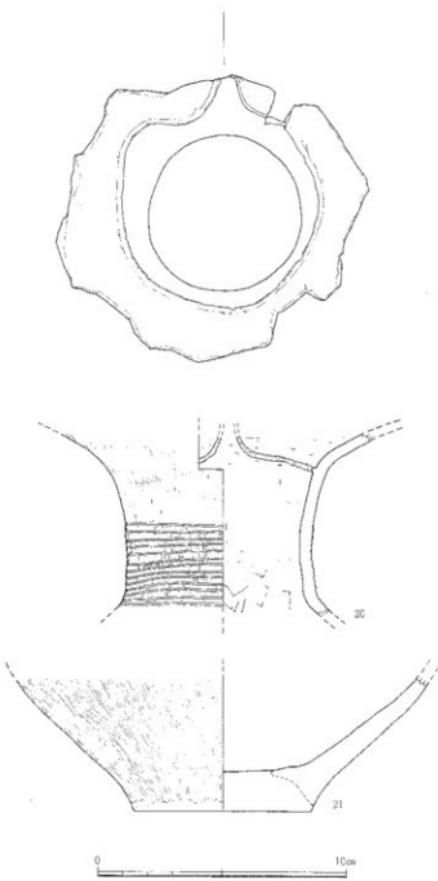
12は直口の鉢である。口縁部径24.7cm。体部はやや内弯し、口縁部は少し内傾する。端部は

丸く収める。外面調整は縦方向のハケ調整、口縁部は横方向のナデ調整を施す。内面調整はナデ調整を施し、口縁部付近には指押さえを施す。口縁部外面に断面三角形の貼付け帯をめぐらしている。色調は淡褐色で、胎土には2.5mm大的白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

13は壺ないし鉢の底部である。底部径9.5cm。平底から直線的に広がる体部を積み上げ胴部はミガキを施している。内面はナデ調整を施している。色調は淡褐色で、胎土には2.5mm大的白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

第16図18は大型の広口壺の口縁部である。口径30.2cm。大きく開く口縁部の端部を垂下させ、端部を刻んでいる。外面調整はハケ調整の後ナデ、内面調整はナデである。側方の端面には縦方向の籠描き沈線紋を施した後、横方向の籠描き沈線紋を施す。内面にはもっとも外側に籠描き沈線紋を口縁に沿って凹形に施した後、二角形のスタンプ紋を連続して施してから2条の籠描き沈線紋を施す行為を3回繰り返す。

19は大型の壺の体部である。胴部最大径47.8cm。玉葱形の胴部の最大径付近に直径2cmの円形浮紋を3cm間隔で貼り付けている。外面調整はハケ調整の後ミガキ、内面調整はハケ調整の後ナデ調整である。円形浮紋の上部から13条の籠描き沈線紋をめぐらし、最上段と最下段の外側を削って段を作り出している。さらに肩部付近では8条の籠描き沈線紋をめぐらして、その最下段を削って段を作り出し、連続三角スタンプ紋、2条の籠描き沈線紋、連続二角スタンプ紋、2条の籠描き沈線紋、連続三角スタンプ紋と繰り返しその上部に6条の籠描き沈線紋をめぐらしてその最上段を削る。18、19とも色調は淡灰褐色、胎土には2~4mmの石英、長石をや多く含み、焼成はやや硬質である。



第17図 弥生土器実測図(3)

20は大型の壺の頸部である。頸部径15.6cm。やや上方へ広がる頸部から強く外反し、大きく広がる口縁部へ続く。外面調整はハケ調整の後ナデ、内面調整は強いハケ調整の後ナデ調整である。口縁部内面に突帯を貼り付け、注ぎ口状に作る。頸部外面には13条の鉢描き沈線紋をめぐらせる。胎土には2~4mmの石英長石を含む。焼成は軟質である。

21は大型の壺の底部である。底径14cm。広い平底から強く広がる体部に続く。外面調整は綫方向のハケ調整、底部付近のみナデ調整を施す。底面の調整はナデ調整、内面調整はハケ調整の後ナデ調整である。色調は淡褐色で、外面に黒斑がある。胎土には2~6mmの石英、長石、シャモットを多量に含む。

SD303 14は甕である。口縁部径26.4cm、残存高11.8cm。如意状に外反する口縁部で、端部に面を持つ。外面調整は胴部下半に綫方向のハケ調整を施し、施文部付近はナデを施す。口縁部には横方向のナデ調整を施す。内面調整は磨滅のため、不明である。口縁端部はハケによる刻目を入れ、口縁部直下に4条の鉢描き沈線文を施す。色調は外面は明褐色、内面は灰白色である。胎土は1mm大の白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

SX302 16はSX302の墓壙内で検出した甕である。1個体分が土圧で押し潰された状況で出土した。口縁部径19.5cm、残存高21.8cm。胴部がやや張り気味で口縁部は如意状に外反する。外面調整は胴部が綫方向のハケ調整で、口縁部はナデ調整を施し、内面は横方向のナデ調整を施す。口縁端部に刻目を入れ、口縁部直下に13条の鉢描き沈線文を施す。色調は灰白色、胎土には1mm大の白色鉱物粒を含む。焼成はやや軟質である。

SX303 15はSX303の墓壙の下層から出土した甕の底部である。底部径7.5cm、残存高8.2cm。円盤状の底部から直線的に積み上げている。外面調整は綫方向のハケ調整を施し、底部のみナデしている。内面調整は磨滅のため不明である。色調は外面は明赤褐色、内面は淡褐色から明赤褐色。胎土には白色鉱物粒を含み、焼成はやや軟質である。

## (2) 繩文土器 (第18図)

第18図22は溝3の底部付近から出土した粗製の深鉢である。口径26cm。胴部は内窪し、頸部から口縁部にかけては外反する。口縁端部は面を持たず、丸く収める。外面は横方向にケズリで整形した後、横方向にナデで調整している。内面は摩滅して。色調は外面が暗褐色、内面が褐灰黄色。胎土には1~4mmの石英、長石を多量に含む。焼成は軟質である。時期は北白川上層式3期~一乗寺K式である。

## (3) 石器 (第18図)

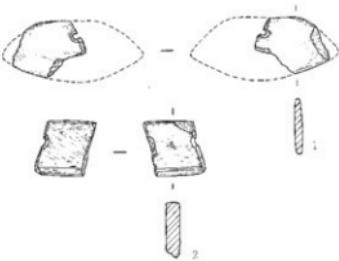
1はSD301の土器集中地点から出土した緑泥片岩製の石包丁の破片である。残存部の最大幅4.5cm。磨耗して刃先は丸くなっている。直徑8~9mmの円孔を両面から穿っている。各平坦面には成形または調整時の研磨による擦痕が見



第18図 繩文土器実測図

られる。

2はSX301の上部から出土した塩田石製の石包丁の未製品である。幅は4.3cmで刃先には研磨されてできたくぼみがある。円孔を両面から穿っている。各平坦面には成形または調整時の研磨による擦痕が見られる。この他にサスカイト製打製石錐2点、サスカイト製打製石錐1点、砂岩製大型蛤刃石斧の小破片1点が出土している。



第19図 石器実測図

#### 第4節 小 結

時 期 弥生土器は形態及び、鏽描き沈線文の多用、貼

付け突帯文の使用などから、概ね前期の新段階の中に収まる。『様式と編年』[森田1990]に従えば概洋I—3様式にあたると考えられる。1次調査の落ち込み1から出土した土器群[丹治1991]とは器種構成・形態・紋様・調整などから見て、ほぼ同時期のものと考えられる。

#### 周溝墓

兵庫県内の前期の周溝墓の報告例は尼崎市の東武庫遺跡[山田他1995]の15基のみである。周溝墓の規模の点では東武庫遺跡ではばらつきがあるが、雲井遺跡ではめったばらつきは見られないようである。形態は不整形な円形と長方形であり、従来の知見と変わることはない。ただし、前期において両者が接して造営された例は香川県の佐古川・窪田遺跡[香川1997]のみである。前期の円形周溝墓は他に岡山県の百間川・沢田遺跡[平川他1993]の2例のみで、検出例は少なく、分布は瀬戸内を中心とする。これらのことから周溝墓の形態の違いは造墓集団の出自、性格に起因するものである可能性がある。東武庫遺跡では從米の知見に反して單葬が最古段階から存在することが明らかとなった。今回の雲井遺跡での成果では調査面積が狭いために単葬か多葬かについては不明である。しかし、周溝墓3のSX306は墳丘の外縁部に位置することから、多葬の周溝墓であった可能性が考えられる。また、周溝内埋葬がこの時期から存在することが明らかになったといえる。周溝墓の構造としては溝底から墳丘頂部まで、20~40cmと、比較的墳丘の残りは悪いにも関わらず、主体部の痕跡が残っていた。この点から、この周溝墓の墳丘はあまり高い盛土を持たなかったと考えられる。主体部の構造としては側板が小口板よりも外側に伸びるH型ではなく、側板と小口板がぴったり合わさる型式であると考えられる。今回検出した主体部の上部には必ず拳人の亀印跡が置かれていた。この標石を墓壙の重複を避けるために置いたものであるとするならば、先に多券であるとした推定の傍証となろう。弥生時代中期の方形周溝墓において、周溝内に多量の土器を投棄する事例が大阪府の東奈良遺跡[三木1996]・螢ヶ池北遺跡[大庭1995]・兵庫県の加茂遺跡[瀬戸田・藤井1996]を中心にくつか報告されており、今回検出したSD301の土器群はその上限を過らせる例となる。これらの例では供献、または廃棄される以前に破碎され、取り上げた土器どうしはほとんど接合しない。しかし雲井遺跡のものはほぼ完形に復元できる壺8など、復原可能なものもある。しかし、多くの土器は、ある程度まで復元できても上部を欠いていたり、口縁端部を欠いていたりして完形に復元することはできない。

**土 器** 土器についてはまだ全ての土器の検討をしていないが、壺には如意状口縁のものと、逆L字状口縁のものの2種があり、如意状口縁のものには貼付突帯のものと、窓描き沈線のものがある。逆L字状口縁のものには窓描き沈線文のものと、無文のものとがある。また壺の中に、生駒山西麓産と考えられる、チョコレート色の色調で胎土に角閃石を含むものがある。逆L字状口縁のものは秋山浩三氏によって「瀬戸内型壺」として分類され〔秋山1992〕、備前・讃岐地方を中心に分布することが明らかにされている。雲井遺跡において逆L字状口縁のものが比較的多いのは雲井遺跡が磨擦よりであることによるものと考えられる。また、生駒山西麓産の土器は河内の人々との交流を示唆する。

**石 器** 雲井遺跡から出土した石器及び剥片について石材を見ると、66点中63点がサヌカイトである。このうち肉眼観察で、金山産と見られるものが大多数を占める。しかし確実に二上山産と見られる緻密なサヌカイトも少数ながら存在する。近隣の類例ではI様式前半の大門遺跡〔前田1993〕ではほとんどが金山産のサヌカイトで占められ、I様式後半の戎町遺跡では金山産のサヌカイトが6割を占めている。またII様式の芦屋市若宮遺跡〔芦屋市教育委員会1998〕ではサヌカイト48点の内5割強を二上山産のサヌカイトが占め、金山産は3割にとどまる。弥生時代前期において金山産が多い状況について菅原太郎氏は水田稲作の伝播との関係を考えている。また中期に入って二上山産が増加する背景については石製武器の大型化にともない、肉厚で重量感のある二上山産の方が機能的に優れているというところに原因を求めている。〔菅1992〕こうした状況と今回の調査結果を比較すると、戎町遺跡〔山本1989〕ではいち早く二上山のサヌカイトを受け入れているのに対し、雲井遺跡では、まだ旧来の流通のままに近い状況である。しかし、少数とはいえ、二上山産が存在するという事実が中期における流通の変化へ向かう兆しありと見られる。I様式後半においては二上山産のサヌカイトの導入をするか否かについて各遺跡間でばらつきのあったことが考えられる。

土器と石器について見てきたが、いずれも強い西方からの影響と、若干の河内方面からの影響が見られた。これらの現象は前期における弥生文化の東漸と、中期における地域間交流の萌芽とに関係があると考える。

石 器	点 数	石 材
石 壺	2	サヌカイト
石 鍤	1	サヌカイト
石 包 丁	2	鰐泥片岩、塙田石
大型蛤刃石斧	1	砂岩
木 製 品	1	サヌカイト
剥 片	59	サヌカイト

表1 石器及び石材一覧表

## 第IV章 ま と め

今回の調査では、第2道構面で古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物の柱穴の一部を検出した。今まで、雲井遺跡では古墳時代後期～奈良時代の集落の存在は確認されておらず、遺跡北東部にあたる今回調査地点周辺に当該時期の掘立柱建物を中心とする集落が存在したであろうことを示す初例である。また、旧生田川左岸の自然堤防上に点在していたといわれる生田町の古墳群〔神戸地方古墳1956〕被葬者の居住地を推定する上で、一つの手掛かりを得たといえる。

従来、雲井遺跡は弥生時代中期に周溝墓を主体とする墓域を形成する遺跡として知られてきた。しかし、今回の第8次調査では、弥生時代前期新段階の周溝墓群を検出した。その有り様の特徴は、溝を共有しながら連続して墓域をつくり、周溝内へも木棺の埋葬を行う点である。第III章第4節小結で述べたように、弥生時代前期に遡る周溝墓の中では特異な例といえる。けれども、遺跡西部の第一次調査〔丹治1991〕で検出された弥生時代中期の周溝墓群も基本的には、弥生時代前期の本調査例と同質の様態と考えられよう。従って、雲井遺跡の弥生時代の造墓集団は、弥生時代前期以来連続と中期にいたるまで、造墓地を移動させながら、ほぼ同一墓制を探って墓域を形成していくとも考えられる。今後の周辺部の調査をまって検討していく必要がある。

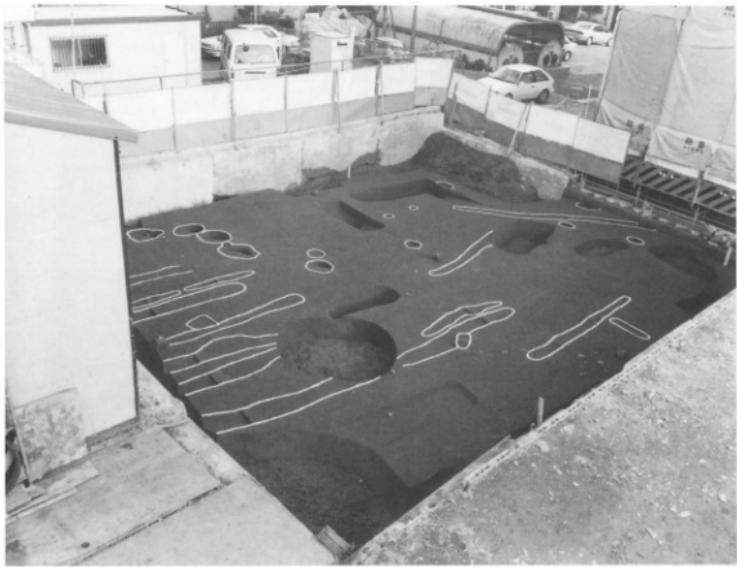
今回検出の弥生時代前期後半の周溝墓群の墓域は、第4次調査〔安田1994〕弥生時代前期遺構面で検出されている不定形周溝(SD301)にみられるように、旭通5丁目付近まで拡がる可能性がある。

なお、今回の調査は工事影響範囲内に限定したが、調査範囲外はトレンチ調査で下層の遺跡の状況を一部確認した。調査範囲外の下層では、弥生時代前期前半・繩紋時代後期の土器とピットを検出した。付近における従前の調査でも検出されており、今回の調査地付近に相当の拡がりをもつ同時期の遺跡が存在すると考えられる。今後、調査にあたっては留意が必要である。

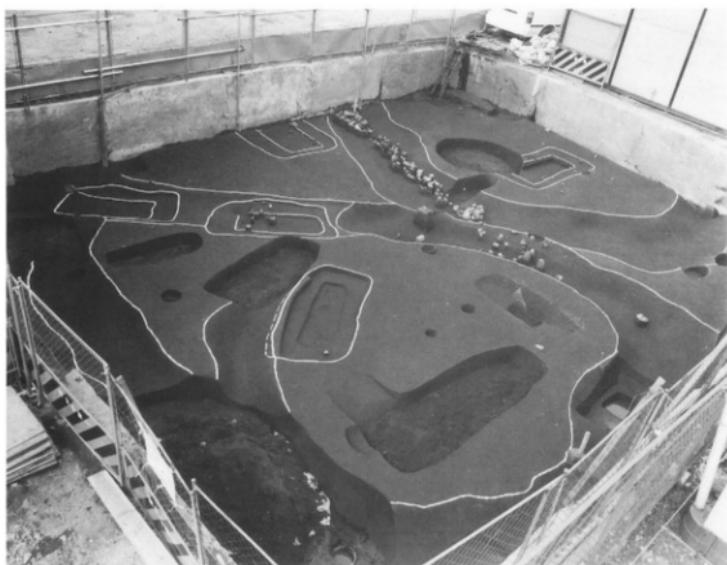
註

- 秋山浩三 1992 「弥生前期土器－遠賀川式土器の地域色と古備」『吉備の考古学的研究』
- 浅岡俊夫他 1996 「熊内遺跡－第2次調査－」六甲山麓遺跡調査会
- 芦屋市教育委員会 1998 『若宮遺跡（第1地点・2地点）発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第30集
- 大庭重信 1995 『弦ヶ池北遺跡第12次発掘調査報告』豊中市教育委員会
- 香川県埋蔵文化財調査センター 1997 『左古川・産田遺跡現地説明会資料』
- 神戸市 1989 『写真集 神戸100年』
- 神戸地方古墳調査保存準備の会 1956 『神戸地方古墳地名表』神戸市経済局観光課
- 小林行雄 1935 「神戸市布引丸山の弥生式土器」『考古学』第6巻4号 東京考古学会
- 菅栄太郎 1992 「弥生時代の石器生産と流通 横岐平野における一樣相と近畿地域との関連性－」  
『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 菅本宏明 1993 「旧一宮駅構内遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
1994 「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 大日本帝国參謀本部陸軍部測量局 1887 『仮製図』
- 谷 正俊 1989 『日暮遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 丹治康明 1986 「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
1991 「雲井遺跡第1次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 仲彦三郎 1911 『西倭大觀』
- 福田田佳男・藤井 肇 1996 『平成7年度川西市発掘調査概要報告』川西市教育委員会
- 平川 勝他 1993 『百間川汎田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- 前田住久 1993 『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
- 丸山 漢 1990 「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会  
1992 「熊内遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 三木 弘 1996 『東奈良Ⅲ・郡遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 森田克行 1990 「攝津地域『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 安田 譲 1994 「雲井遺跡第4次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
- 山川清創他 1995 『東武庫遺跡』兵庫県教育委員会
- 山本雅和 1989 『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会

# 写 真 図 版

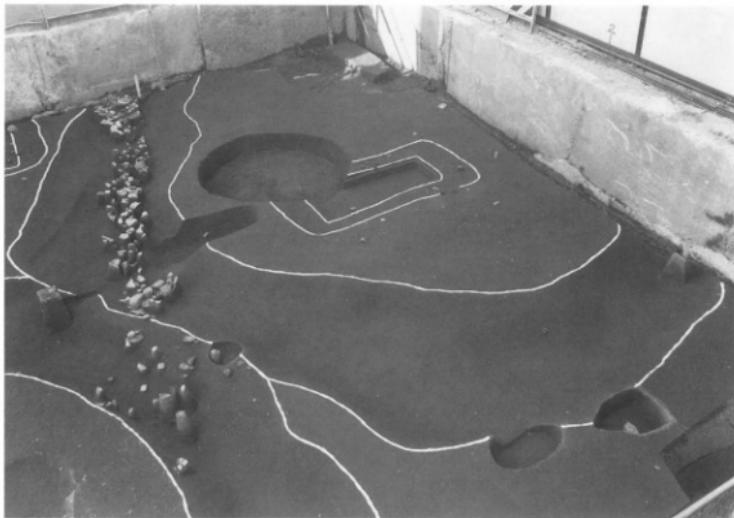


1. 第2造構面全景（北西より）



2. 第3造構面全景（南東より）

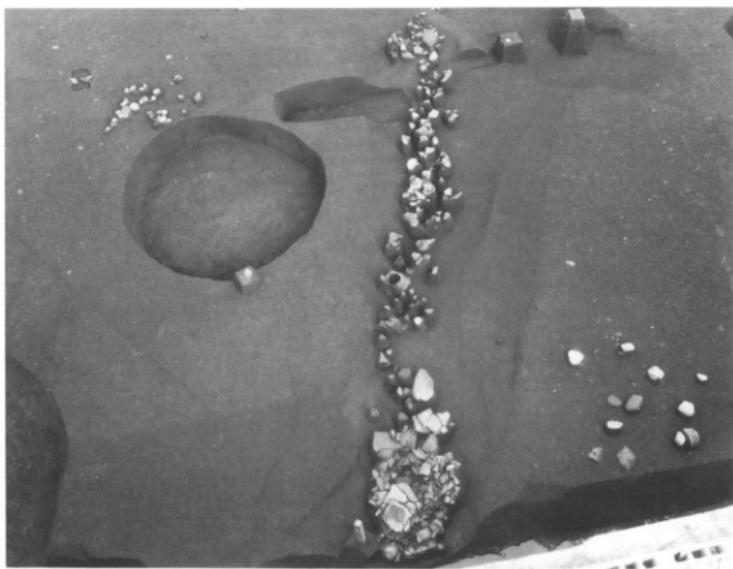
図版2



1. 周溝墓2（南より）



2. 周溝墓3（西より）

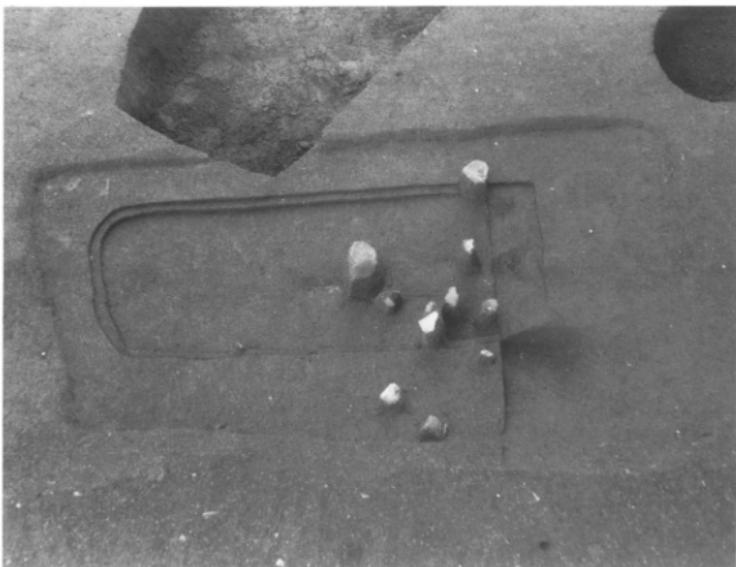


1. SD301 遺物出土状況（西より）

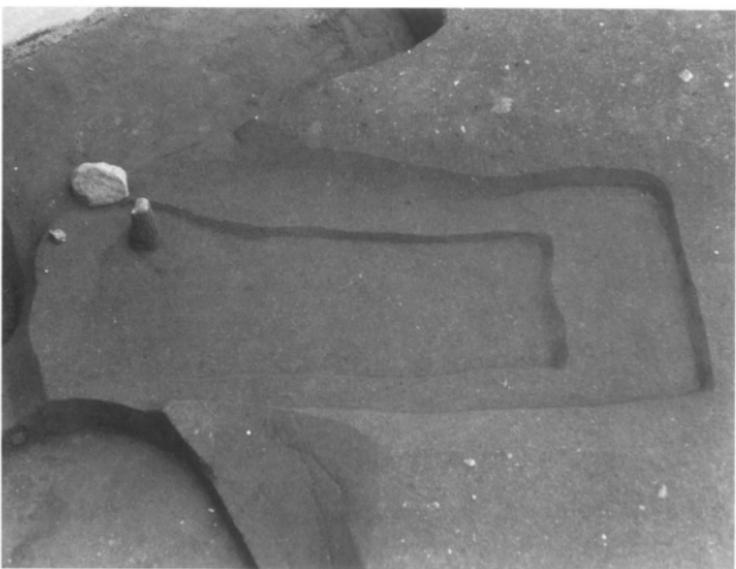


2. SD301 遺物出土状況（東より）

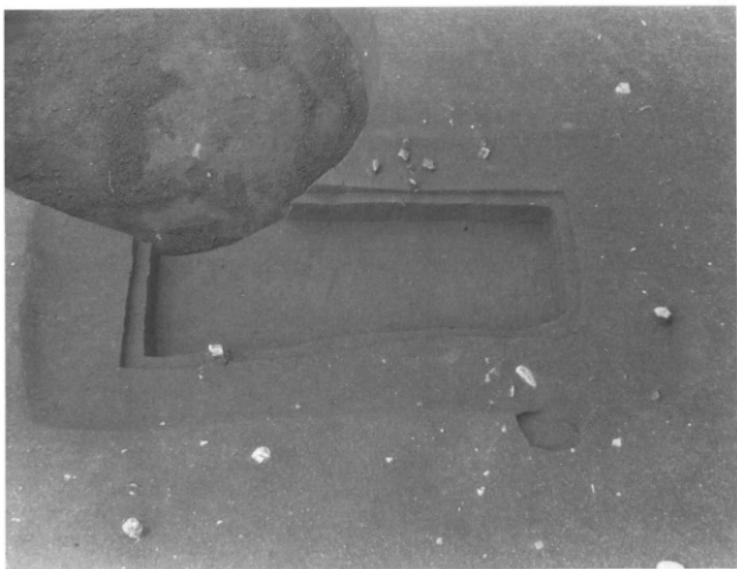
図版 4



1. SX301 検出状況



2. SX305 検出状況



1. SX303 挿出状況



2. SD301 鉢形土器出土状況

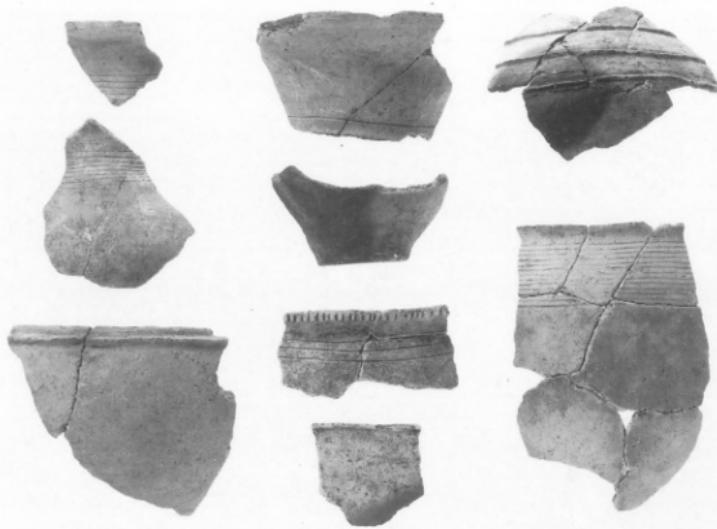
图版 6



1. SD301 壶形土器出土状况



2. SD301 壶颈部出土状况



1. 亦生土器



2. 异生土器 大型壶体部

# 報告書抄録

ふりがな	(もいせき (まいはくちょうさ) -しんきふっこにともなうまいぞうぶんかいはくつちょうさぬよう)						
書名	雲井遺跡(第8次調査) -震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要-						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
編著者名	西岡巧次 福島孝行(共編)						
編集機関	神戸市教育委員会						
所在地	神戸市中央区加納町6丁目5番1号						
発行年月日	平成10年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 ○○°○○'	東経 ○○°○○'	調査期間	調査面積	調査原因
雲井遺跡 兵庫県神戸市 中央区旭通 3丁目38番 5		28110	34° 41° 19°	135° 12° 23°	1997.12.10～ 1998.01.18	170m <sup>2</sup>	事業用倉 庫再建
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
雲井遺跡	墳墓	弥生時代 前期	周溝墓3基 木棺墓6基	弥生土器 石包丁 石錐・石錐 縄紋土器	弥生時代前期後半の周溝 墓と木棺墓を検出した。 周溝内出土の弥生土器は 弥生時代前期後半の一括 資料である。		

雲井遺跡  
(第8次調査)  
—震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要—

---

平成10年3月 印刷

平成10年3月31日 発行

発行 神戸市教育委員会  
神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷 有限会社 興文社  
神戸市中央区中山手通7丁目5番7号